

文章の提示媒体と機器操作の意識が文章課題の成績に及ぼす影響

砂山 優美

近年、電子書物の台頭が進み、紙媒体での読書と電子媒体での読書の違いがこれまで何度も研究されてきている。しかし、電子媒体に対する得手意識の差を要因として実験を行った研究は少ない。また、正答率を指標とした研究内で、読書課題と校正課題で媒体間の差の有無が変わることが示されている。本研究では、機器操作の得手意識に関する質問紙をもとに参加者を低・中・高群に分類した。本研究の目的は、読書課題と校正課題という課題の種類の違いによって、使用する紙媒体と電子媒体での課題成績および主観評価に差があるのかということ、さらに機器操作の得手意識を要因に加え、得手意識によって課題成績に差が生じるのかという2点を検証することである。仮説は3つあり、仮説Ⅰ「読書課題において、機器操作の得手意識によって媒体間の課題成績に差はない」と仮説Ⅱ-i「校正課題において、機器操作の得手意識が低い群は紙媒体の方が電子媒体よりも課題成績が良い」、仮説Ⅱ-ii「校正課題において、機器操作の得手意識が高い群は媒体間で課題成績に差がない」であった。また仮説に加えて、両課題における主観指標の結果について探索的に検討を行った。

大学生 34 名を対象に実験を行った結果、仮説Ⅰはパフォーマンスレベルでは支持され、主観評価レベルでは支持されなかった。仮説Ⅱ-i は支持され、仮説Ⅱ-ii は不支持であった。パフォーマンスレベルでは紙媒体の方が電子媒体より校正作業において成績がよい、また読書作業では媒体間の差がない、という結果となった。これは福田・内山(2013)の結果と一致する。また主観評価レベルでは、両課題とも紙媒体の「快適性」「操作性」が電子媒体より高く評価される結果となった。このことは寇・椎名(2006)とも一致する。機器の得手意識に関する質問紙の結果から、低群には機器に対するあきらめが早く、機器をさわろうとしない人、また Excel を使用しない人がいると読み取れた。また、高群には機器への興味が強く、論理的な試行をする人が多いと読み取れた。一見すると機器への興味が高いことは機器を好ましいと思うことにつながると思われるが、媒体の快適性の項目については紙媒体の方が電子媒体より快適性が高い結果となった。

今後、質問紙の項目を精査して質問紙でとり、より特徴が際立つような群分けを行うことが必要である。電子媒体のさらなる普及には、技術発達だけでなく、何故人々が「電子媒体は読みにくい」と感じる理由を追求しイメージを改善することが望まれるといえる。(安全行動学)